玉我し利御為　十一

イ 號
508
11

○[illegible]神巻之十一

凡樂の名目文字ハ見てもよみかたき事多く入まじる人の嘆なる

ことハ溪渇音皮の稽習なりまた人衆の気をやしなふ人ハ

樂の名

皇帝破陳樂（ソハウグイハヂンラク）　團乱旋（トランデン）　万秋樂（マンヂウガク）　央宮樂（ヤウグウガク）

秦王破陳樂（ジンワウ）　春庭樂（シユンデイ）　是ハ右方の樂なり

拔頭（バトウ）　新鳥蘇（ドリソ）　古鳥蘇（トリソ）　退宿德（グイシユクトク）

長保樂（ボウ）　登天樂（トウデン）　是ハ左ノ樂なり

此類數多ある事及什器多くの名目等よく作を

諳すして唱ふる事なかれ

○まへに一郡貨を賣る商人ハ市中に而報を鳴して人を集

むかで銭を烏嬌娘といふ　雑貨纂要

○銭を料足といふは銭にこれを何しと云晋書魯褒銭神論に無翼ハ而飛無足而走といひしより起れり　白玉蟾集雲遊歌に祠到家山辞閑暇下有銭三百足といへり一文を一足といふなりとも

○家尾府下正月市井に立る心行ハ三毬杖の遺なり俗にいふ杉木の人の彼地下正月立るもこれに等し　但町々辻の中央に是をたてゝ七十余年の石柱と也し　杉竹をあつめて是を御柱と呼又幸の神とも称す　諏訪社三月中酉祭日御柱を立る国風にこれに准せるにや　市井の小童集りて柱の下に童半の中ノ人を引る名づけてあびせ柱下これを饗するならはしとぞ　又御柱を立る所に縄をはりて節と節との折かけ路せよこぎりこれに本づきて人形をつくりあつらへて紙衣をきせいはひとて厄除につるし車地下皆同じ事節分披露いたし

○長良事良を或人ヤチヨトハ申すとされもよろしく後成忠守殿のうたにいはくやす藤原雅枝ハ廿千丹と後つゝ其死　孝元天皇の玄孫の縁として百千歳の縁を結せしむ其玄たる雄長也と総義こしる處死に盛縁を襄殺すと尋ねせし遊に御陽ヶ日をあそびし者の神よみたりや小野秋風といふ福田にありしを舩と云にすむとあし何とも見へすとありて只是利にめぐりし路にえ浮のい者旧詩郷風柏舟と稲にスハムト浮舟ハ蓋せト雜毛破意と云事にそえて云ます流傳そむれんへといふに擬して用ひ来

次急なる事あつまりし絵ありしが六府なる舟蓋也といふ字 細
字に書入ありしを見けれハ人の筆なりとて人々感じしかハ元絵留なく
して通電せしとぞ
○周易をよみて云附ハミエヤクと読之 戴村筆 路元定の附易の語を
川まハアルフミニ云トいふ類なり
○瓢より弱と云事語ある見えて卯月江録に張果老踏破故盧ノ
といふ文張果か故を以て驢馬とせしを取合せて描けるにや
○孔光佛吸酢圖ハ何人か描初め人壽椿庭賛せしかハ全此の圖を
何にす東海瓊華に記せり
○佛者右膝著地ハ胡跪とも云生致右といふれハ三代而此礼儀

またも虎穴此海北集なる見へたり
○朝鮮平安城より一里ばかり南に麗城とて之處を河边
岩ありて多く一二丈ばかりの大石西に高麗王者日本大也と彫刻
せりとて字大サ一二尺ばかり物して切入りしと云川肥後彼地
まで説ししなり尺ししと云ふ 林氏説
○いか九の数珠ハ密家の説事しかりやとさんに問ふ申にて
ハ術法者の見ゆるしきせる説事也家角（イラタカ）とも云ふ
○不動明王に四臂の像ありそれハ読究術法の時の姿なりとぞや
日蓮宗に年なる事ありて迷深き中ちめと合掌に造り儀軌の
説に見えてあり年中に説等かあるハすこし数ハ加法を此安もを

似せて己か家のものといはしめしものと云々

如法堂ハ慈覚大師初て建立し後恵僧都釈迦多宝四菩
薩を造りて安置しありけり叡岳要記山門記にみえたり
其釈迦多宝の印相相傳の像を背にして四菩薩も山門の故と
同しと述へり

○地下ハたとひ二位三位に叙すれとも下襲（シタカサネ）表袴（うへのはかま）指貫（サシヌキ）有紋を
着せさりき然るに近世摂家清家諸花族より古事を
指尽して有紋を用ゆ（地下二位三位ハ社家ニアリ）近年ことに其色を
これを着して常の事と思ひしかれと思ひて驕僭といふへし
又林氏の如きを聡き四位五位の殿上人或ハ緯（ヌキ）白あや平緒紫を用ゆ
の指貫をさせし事武家の中少将侍従として輙く紫の指貫
を用ひす只深浅葱の緯白なり況諸大夫ハ是に下りて平絹なれ
の指貫なりとそ今の諸社の神人六位といへとも様（ワキアケ）袍紫の指貫
等を着するあり位しもなき社の神衣をやとひして着する例あり
警固の非違所 古例なくして私に用ゆるハ忠信なきことにこそ
　近世或家の下部家私に如此して様を服せしも
　倣ふ所なり哉

○真福寺上人（宿天）大栖第三世仁瑜法親王（後村上帝王子）東南院の宮と称す
東南院在處何の地なるや高野山の東南院ハ智泉大
師の草基なりや然るに後又南都東大寺の東南院ハ其の
寺務職なり仁瑜親王も南都東南院の御門跡なりしと

一華厳宗の法流なりしか、寺ても大かたなりしそ事のよしなきかす
たゝすゝ参入ことなしき事也

○墓上に植し松をあ枝松とて、あ孫之作、双實之とや、蘇東陶
きとかきなるくし古詩よ松のもりし、詠ろちるしあり

○蝉丸よふひと訓せり、大和あみより歌多し、後に肖酒魚と
法流にして無分行る八死丸とるい作りし、それより文旅よひ
せしとかよしの網とゆへ後歌あしに及かなり、和泉のことくよ
るへし段

○正徳四年甲子三月十七日より十九日まて胡蕃日文血のことくよ
光観あかりし月も赤銅色のことく赤く光なく、恐れけしき

殊なかりし月も赤銅色のことく赤く光なき故、不審に記す
御かくれ人驚し、街々流かる事もかしあるやといへり（四ヶ）
予曰、元禄のときもありしやと見へす、寛文十九年癸卯春 朝
日如銅と記せし、御年譜よ之をのせ給ひしか（安永班の頃 地震ありし）
寛文二年壬寅二月朔日の日月食のことく光なかりし（此年五月大地震 六月洪水おびたゝし）
去ては、人々とけやなく御祈禱し、今ハすゝむ事も稀なり

○また文化のはしめ、日月光なくて、一七日ほと甚雨の降りて、続つよ

○まつ文つきよし出奔の果てまて、内藤様、仰れよ御祈禱し
の八丹後と相、卯月に御供物大麻を御庭へ掛け給ふよしや

一庵上院の比より月光を増して空のけしきも静なりし

かう行

○枳椇とけんぽのなしと読り　然るにケンホノナシトハ此の利者と

云々香圓利井江南橘と對しすなはのこ

○大毘盧遮那成佛神變加持経大日経也

金剛頂一切如来眞實攝大乘現證大教王経

蘇悉地羯羅経

金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇経

大毘盧遮那佛説要略念誦経

右真言五部秘経

○玄義　文句　止観　法花三部天台ノ説

右三大部也

○金光明経玄義同経文句別行玄義同文句観音経

観無量壽経疏

右天台所五小部と云章安の記あり　此宗拔ト云

○仏多羅仁王経二諦品に龍して法花と此へり未相をなぶつ

仏年の事なるへしされと漢唐の人云神しすする是れを仏年

に給ひとして本とふもえへるすと人あるへ仏ふす今仏すま

此事あるとえて拗て将する候ふ

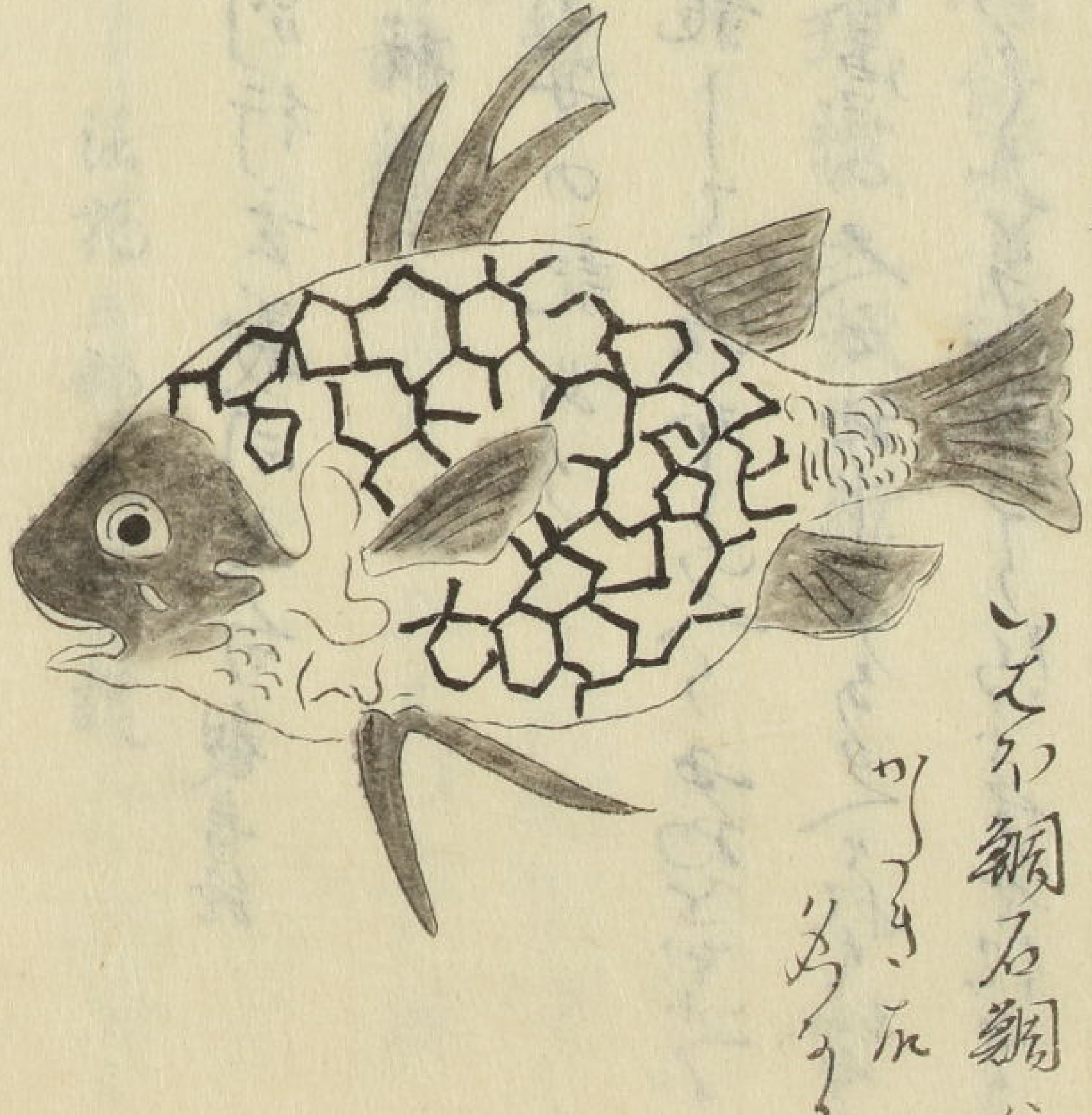
○或同明朝の皇子入たへしやと帝白宝永庚寅琉球王子入貢

東都にして大島同李明薩摩中将家の邸にて王子の清す

一 うけせし事を何事し中に前胡の子孫今は小郡と封し順靖王
と称すこし蓋へしといへるは是れとなる子孫なと見へたり

○眷属 妙宗玄義曰親愛故ニ名眷ト 更相臣順故名属ト

○夷鯛 戎岩鯛 石鯛
東海又は陸奥にこれ海中に
孔甲魚之東玉鹿邑又ま
て邪言を壌又華沐の
鰈も似たる魚なり
かつきと称すなれは
ここに



いしだひ 石鯛は
かつきとも名つく

○近世左門右門等の称は東百官とて織田信長の在世に 右
人名字をつけしや百年来の侍風殺伐し台記の中に左馬射
をとりとふ事あり是記録のむぶねすといふもの也
左右近将射同様を兼せしを左門右門と云しも同し然
るに今のこれは右京亮某とは名を呼ふへし實に京後はまた山
家の臣某は東海ちかくに類しけは神君にて御実を
ひしは彼土(ウツクツ)の小分とうたふ事を申してはれし仕あり
それは筆の類漏のむしこされはけくとされて名にかて
あとうひし事にて後家小ちり實に京に仕れし時彼類
漏は深しくなくなりやと此名ありとて申しおれれ時従こ

とゆらし故に人物痛と異名とせられし今に原隆人く名の
足跡く新府下枝梅集も理らさく歌を術て殿く言名あ
そしらの呂よふく人世らきく名と後あるし花翠名とせしれ
せるよ也りし

○天元浙の法を秘密の修法より前山御集菓子撫仁菓堂の
名人の発元せし旅館よハ今傳る天元堂ゆう　山門に天元院有ゆり

○熾盛光佛頂の法も京家の大法之旅館ハ青蓮院にさると
梅室よ堂ゆうて法之行すせ々

○成田舊年釈迦を御取あり法よ加をとぞすしと噂ハ何とや
菩薩實次盧舎那之天徳合食堂よ安置すたしぶすと聖法

○尾府泥之（別に 瀧と云）

尾府の俗語よ其之婦人の白粉あつくぬるをおそら
まずのとさしとゑひし前甚角年人人無益也り能ほ称と
い面白とおりて教る人と々中風法如くり其見天狗し

○諸府よ泥し若狗く新年節分の日黄わら市井競繁閑
主意とりて新く詰新あり物語字の社よ詣人多くハお彫まさ
赤坂よ社り神事社く一同よ集をまて小名人と称生者び
十二町人八地震の中にまさ今花を守みて新て一件よ事を
井戸ぬよ殿て古内置の加より夫と成り薪を焼く葦地ふ
幸も きこへず当月しても豊凶ささまし かりまさ 成籠人ハ

宿りてたる旅して去なし

○浦飛鳥の義は定をくしてゑらし時平行りとや京よりて或説をかゝ浮に行りし事推りて考すへき事歟

猶世にあり

○無しる人歌染の色とかて詠れ来よりせ世にしてみかせん

とし

あかはすくこれを見るに今も以て別れし名残の手枕

等閑なる日の世を思ふもあはれ又荒ヘて旅後の人と詠りとや思

乱を隔りて後花よそくて来てあるなる事を思ふと忘れてを

しと見し人ぞなり侍る

○玉川和哥にあり山城攝津近江武蔵陸奥紀伊何れ名の

所をも又よみ来れり云々ありこれをこれへとおもひ

おかれ又何し分りて古歌を記は経緯 小田にとも語りて 小田井とも

あしや玉の井 兄今ますとりや文献當は隠なき名

は紀輔付の家拾遺集に見るは何哉なる時は難歌のあれとも

紀哥よをなれは勅撰に入りけたとは古人の哥とて撰集

のかたちは是を見あるまじく或書に歌の人云ふ

○角田川是も名のあり名も知られと古歌にはなし

對する安倍の尼は新勅撰に入りてあたり京まて

業平とあるは是の名何でも又武蔵なる名所あつまの見る也

川 下 桜川是別の淵となし侍の橋 サクヒカヤ

なんと名もなきをしらず給ふ古歌には読し例なき井には堀兼の
井の外（古今に／あり）野中ノ井桜井亀井（本在）柳ノ井（以下略の）なんどと詠れども
武蔵なるには小石川ハ古歌に読る芥川なれどもかの名
野なる荒藺崎ハ其處分明ならず或人ハ神奈川の浦とも云
とぞ武蔵野ハ今安蘇宿禰の名なるよし歌の里ハ川（武蔵国なり）歌を
あり隅田川ハ在原の業平のよみて入りて新古法師の歌を詩歌山夕
歌も見えて住吉の角田川とひとり聞て新人とあり（新勅撰）
まつち山歌其外今鹿山なりといふつまぬれハ山武蔵野の外ハ
紀伊国にまつち山あれども別に武
定家卿の歌ハ武蔵まつち山と読り
武蔵野ハさくての名なれどもかきて
堀兼中野の歌にもさしのほし何後給ふとも堀兼の井もさも遠か

多く筆の学び給ふ云伝し堀兼の井ハ年迄ヲ方に在之より
中絶えし（新しく武蔵の旅内々ニ見へる）
○当時堀井一紙之今のたして八十年余今度ハ縁を
○後家中世以来家紋ありて其中ヲ三引両ハ祇園守御ハ満月
を代り紋とせりこれを今ミに知りし人多し
大国氏の紋ハ七ツともいへりとも
あれ多し
○三郎とあつかひし云前ハ不断革にて自然生此業を味
常のことくみてころしく其そのとき大師ともしく
様をかゝて永くにありて来世まて縁せしとちかひまして尊ぶ
立花山上ハ山つくし生薬之引きなる地山臨に其鍋を納め延寿送り

○稲荷神社 山城 山城風土記神祇拾遺諸社根元記等に云 神
一決せす 大極倉稲魂(ウカノミタマ)と云のと符なりとも 或説に
稲荷社は秦氏遠祖之を祀る 此説風土記に合して頗る信らる
秦ノ中家忌寸等遠祖伊侶具秦公稲梁を積て富裕を
累種みし陶冶を事とする人家の饗をみらすとて 秦忌寸を稲
魂に祀しを祀るにや

○後土御門院後柏原院奈良院 三帝御骨は深草安楽行院の
法華堂に収まり 明応九年記二水記後奈良院御拾骨記等に見へたり 古より尊貴の骨を収
堂を法花堂と呼る 叡山法花堂の如きは常に人の善根を修
らるる所なり されども収骨の堂を法花堂と云ふ誤なる
右は将家の法華堂なるもあり

俗道理に通せぬ以て 沐猴(イクブラ)者と不當人と呼ぶ 白氏文集 三十六
謬舉者坐不當(セラル)古事に見えて 官人のみを人といへ 威華と損し
たるを俗語と云同じ 如くなられ
○古人の僧に紙衣は風の為なり 夫も無くなりてよし 是は能忍は台
入道蓮生(レンセイ)後 歌なり 三吉野山知識院に住りしとき紙衣
とは紙衣よりはずて白紙をつぎて衣とす 今二月堂の行法に着
せる衣の紙衣と云なり
○叡山妙義法師 誓て魔道に入り 魔王として 叡山を妨けり
しかみ善根に導きんとみる 猶此山中に天狗と云ふ霊験も
著しとや 人々未法の人多く仏道の為に尊ふへき以 抛やる人と

[illegible]

○伊勢人京のしへ之松坂とゟ大の方ニ小町塚あり
往ゟ出町端り 松坂より二里半 右伝之小町ハ男と交りすして死す後ニ代塚
蘭之荳を生ず人ありて田ニ植しゟ無病ニ成ス今ノ虎を撫リ
て大仏ある貢すとゟや之 又之近き田ニ塚とて在塚も 小町塚と云りの雪くニ
ある蘇虎新屋村ニもあり

○信長公の城を攻めし時松本氏某郎 白金をとらして
家信つくりし城を堅せしめられし卯月の東城の四隅田圃 目
に入れて徹ニ火をあげる事をおいたし城中の人々おそろす之
すべて近之所を通して見せしむる其民麦を刈圃まで穀を払ひ

荳をハ許くまつりて責火をうけ焼拾りてあり 是ハ山家
薪なり かくのごとくはむずかしきを用ゆるなし 一村ニ焼捨ゆる薪を置
近所かくのことし されは其の城を堅せん人ハ是を此風俗
とゞむるへき事なり

○軍家足軽物見七ケ條
田切 池 深井 川流 古屋敷 敵の陣見ゆる
本所之けり場 味方後備をさし置
其他山岡原野狭路廣ハ村落の要害篝して
二ツすれは覚の謡ありて味方利あり事ニ危なり

○唐ニ記す之伏兵秦徳之より始まり 史記の記ニ見る雑

廻にありて西戎の法なりて三代にはなかりしとぞ

○陳無忌之世人以紙為九百謂其精神不足 愛日斎叢抄

これは銭一貫文にして百文たらぬといふ意也 今世俗東西を弁へぬをたはけといふも同し

○尾張の玉石郷の里は昔東海に臨みたりしに釋会の光
盤袋へやうやうつけて取所のりなる石の枝を渡し来てねうら
し此石枝にありて打殺しねむり屁とは伊勢なんとすなれ
年経りしら彼尾張の地にして霊たりけれは里人いふなる
祀りて祠を立てしも後猶家と呼て一村のうやまひすると
業もと伝へし

○玄川惟足東都の鹿島店に寓す 尾張名所図会 一丁目 松平組ニ而直良

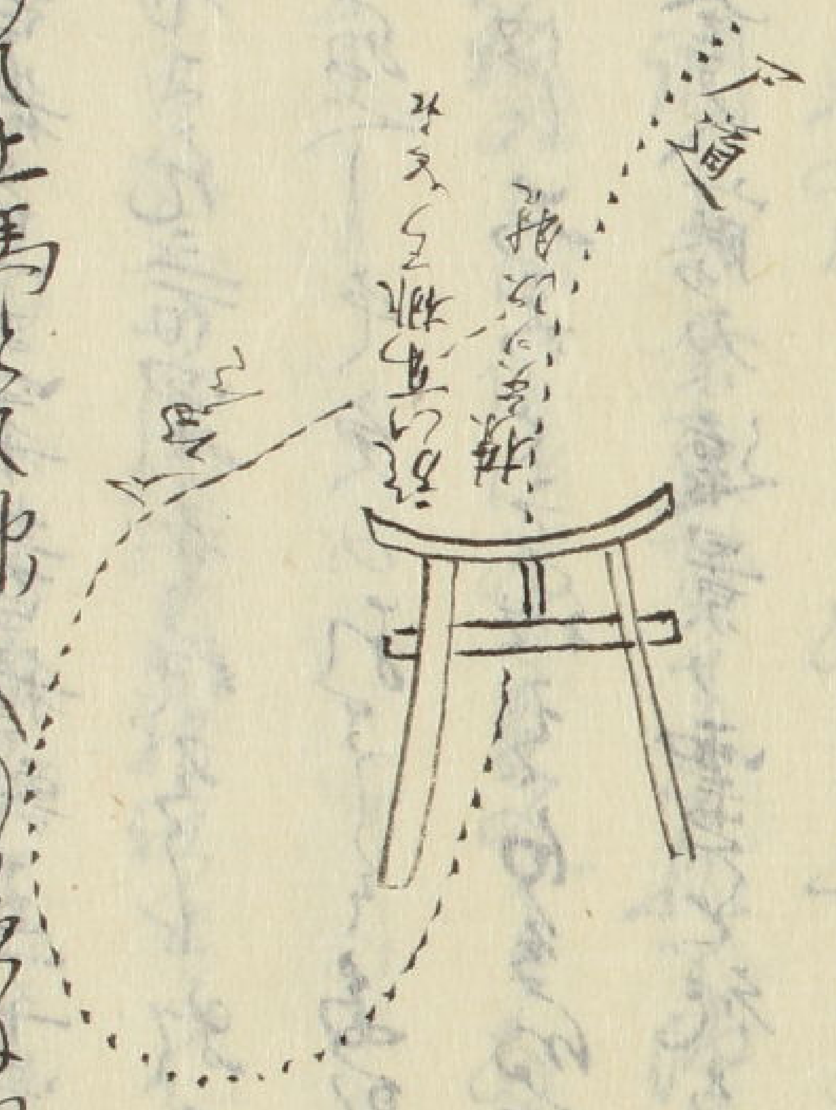
に魚の直千金ありとしへいて價なれさるまへに行頭なる家をとふ
也ころみる人の形なりて往来し京都にある萩原家の下
部なりし者ありしてなし玄関に仕へ萬歳辛後彼家に在を盗れ
いとも自家にして神道をとてくしく聞しは玄関の
人にも甚だあしくて神道を知しと君なれしは京をきかへる
ものなく神道を伝へしと京にて是しは神の守る人と
せ覚えて利ある人の家と落ちす何年四年大坂の陣に遣る
まで仕へし後会人近くなりかけれとも御傍軒春庵 格式正列 少将正
俊 播田藩前 始より彼家を西の丸にまして並に京都へ入自後
を務めし文 敬義庵は土列人 中曽の子 始は祥信 司薬蔵 なりし 山内

家の家を野中主計といふものに譲りて還俗し山崎加右衛門と
称す。稽古の学を得て一世の儒者となれり。後中将正之公に仕
へ一世に名を知られし。晩年に神家の神道を説きて自霊祠と称し、師
上の霊の内に速垂加霊社と額し置けり。垂加霊社と云は其
の弟子もまた師の説を祀りて今に伝へ奉るなりし。京住見等正 佐夜直方ホ 実
も後生今の儒者中に於て称するは此字を何とかく章なりて掛り伝ふるとや
○嫡母 父の妾の子より正妻を云 継母 父再娶之妻 養母 己を幼より扶け養育せられし者を云
慈母 実母死して後父別妾をして養育せしめたる 嫁母 己か実生の母なれとも父死して他へ嫁したる者 出母 これも実母なれとも父に離別せられし者
庶母 嫡母にあらずして父の妾に兄弟ありし者 乳母 実生の母に代り乳哺せし者也
是を八母と云。父の正妻なりとて己を生せし実母の如きを云
九母と云し。八母尊卑あり服忌あり。是より為服を
嫡母以下慈母に至て皆三年、嫁母出母庶母は一年、乳母も又三月
の服あり。一説に乳母は乳母の服なし
○定家は幼童の時乳母に抱かれてありしをめのとこそと詠ぬ
以は家よりみを生まれてより見ても家よりみずる、何れも一首のかり人
ありしはいとをしいと縁りしを定家
萬笠と見て男性なる宗川の句を思ひ寄り
是いかにぞ事の哉すくかりていとけなきく
何とかくいひ初めし和歌の事をかや後まで家初きし時
萬笠其の名残なる、萬笠は八つの年よみ始めしとや

○熊野詣よりすゝといふものあり七ヶ所すへて
すれハ其みとり[illegible]をは中ニ入両肩ニかけて[illegible]
○出雲路に雨にふる草をといふハ玉水晶のれうなり
○尾張国丹羽郡大國霊神社おゝ日のみあと[illegible]正月の儀
進てとゝ列挙の中より記せしは儺追の祭にや大く行事の
例多き事より見て磯戸の祭

北
十前口
五前口
梅 木
先粽
鰯
一献 梅子
二献 鰡
三献
ア土器と神 神酒に[illegible]
そのうち列も次椀同次に

中臈さハ[illegible]列
先馬場清 浄衣二人 楼門 そでする
次幣 二本 次ア ニカタニ白 馬上ムカバキ 弓矢 シ帯
神前に向て[illegible]城[illegible]つ[illegible]あのて[illegible]向鳴[illegible]



楼門
次ニ参籠して上馬とて神人の次ニ里人の走馬[illegible]アと
たてゝ[illegible]神前に[illegible]人なり

○畜生に水魚林鳥野獣の三種ありて其振舞是之様炭経
に魚は三千四百種鳥は四千五百種獣は二千四種凡種数ありとみえて其
かく見え集しは凡三百四十余種なりしかれ共まれにまりて知れぬ
見ゆるとも名なきもの魚のみなりしぞ多かるべし経説是虚ならんや
○三河吉坂緒にあは太郎と云社有り白鳥明神 日本武尊 舎人明神二座之舎
人は天野内舎人藤原遠景ノ霊を祀るとし云中世より天野氏
祀ときせし
○陸奥へ下りけるにはるくの道すがら見すれは石は烏帽子と云事
田の中にあり 石の面は足あとてあり 石の上は葦り荒すとと云 浅香山は本宮と云 奥州下り右の方にあり
里山の井の跡はそこの方山を登りて御前とかみ安積の里にあり

山中まで来て遠く飛りて尺余二ッ置きて其のおちすれは三極行とや
柳川あたりの婦女は老ても鉄漿をつけず眉毛をぬかず 節分の夜
濁芝につれ実家のそれせん男のそれせんと云説ありこれ鹿牧の神
名なりとや又嫁しても娘の方へ年の暮は麻地多くはむすめ
世家例を洞して今家賀すこれを沖之あとて歳とすまする事と
なん千代稲のかりかけ九百麦のかりあけあつとてすらぬ田を聞
ておもむき
○吉田中山家老交に後陀見神社を以て之は吉田の人を交しむ
家老民藝周辺田に式津島及東照宮の神主藏を該社は
里語りと合せんとせしおちもちもなりし 郡君に是を実らへ啓しぬいて止む 今年

已玄春文庄田舎より家年老家へ書を呈しいぬくいへり
しりうも先例をもつて庄田の以ろひあきことと十返にむ修行庄田
家前時謀をもつて伊勢太神宮をうつし家山へうつし企て文明閣上記其余
習今もつ是すれさうや諸国の神社と家まともへんとて皆久しきまれ
○京師六角堂池の坊立花を業とす八ヶ世の手ヶ間人あり
曰二水記大永五年三月の条ニ池の坊立花の事を中せよう
以業ありしと見へたり
○家国神事ニ射礼あり是を里社氏祭日郷人或を射あるを
せし古風ニて今を鏡せきまへれずとせしも今も国ニ半ずや
とて人あり　たるまゝても伝りし

まうこしまでも前ハ或を歩ひて陣行を立し旅ニ射ハ希男之
事也トミ大射儀の解ニ将有祭祀之事當射とあり射て中る
者ハ祭ニ与るをこと得不中者譲ありといふ地とてもあんとえん由
家ものとよあります
○去し戊戌十一月琉球使東行郷国氏将尾両金花山の僧詩を呈し
て越来（ロヘク）王子ニ送りける
不謂我山簇錦繡風光皆與君看移来霜菊色
盈把擎出仙花露半乾
稲葉邑
金花山禪源寺清光坐元
金花山上駐吟鞍霜菊水仙塵外看風雅高僧能

愛客筆頭珠玉色無乾

次和高韻奉射言

金花山法厳和尚

中山尚和聲拜稿

○佐間にさひの川原とて冥途のうとも云石塔つミ水そゝきなる人と
して霊魂ハ蕉源を鎮設ありやと問人侍りし云山城国紀伊郡
佐比の里あり（はた河原）三代実録貞観十三年閏八月制して百姓葬送
の地を定めたまひし中に五佐比里上佐比里河原是百
姓葬送地也と文佐比寺（延喜式所謂七箇寺之一也）九条葬送之車更留杷於橋頭などと
見えし當人おほくしてさほいたれさひの河原地蔵などゝ呼しものか

ハ幽冥の事にし侍らめやん

○大塊秘抄村上の御時に寒風の様を鴻臚館にて人々まゐらせし
に披するは山城の守まくハ上品の風なしと侍りてそのてあきも
きまへやされど番風を云ふす人とて古葉を吹ぬハ濃きなる古葉村より
始めると云磁器をまくりて漱を称と称るハ之れ庭の漱なるより起
りしと云も甚あやしきなる説也

○在原業平を従兵衛部と云ハ宗治中納言朝政無所治にて和泉の
国の守きりて業平朝臣の家を召し五条の猿より住まいけま
にさせられしては逢はれや事々人とて実に侍りしを以てそれしゝハ
當時ハ従兵衛とて称れしとて すけらてらせ遣しと後行

平山住吉参詣の前の茶屋に上中将おはしまして
思ひ出て神代の事も忘れしと昔の御かたりのあらまし給へば
出給ひしそれより御船にて住吉の化現と申伝へし也
天平宝元年丁未七月十五日中将姫京住に落せて葉平を神に
崇めまつる事ありし 院家様よりあり
○むかしの日記に武蔵野の中にあるを川といふは上中将の
事を思ひてよみ給ふ也これ中将の集には武蔵川と云ふ歌
て流るれば御様見て詠と申す也其歌には武蔵野に下総
むさしの中にいとたえる川あるをこれを武蔵川といふとぞこそ
云々せしなどと相武のさかひとは云ふるをや又武蔵の西お様の傍

にある川なり。今の海石榴市坂は西の方の之を東西といふ里
の東なる小川ありこれをいふ。海石榴市は昔日の所にあるまれは若神の
所にむさし川といふも得たまやうなりし
○足代伊予に向けしとや云寺ありて庭池十余丈湯水ほどして
入る事し能はる楼閣の中に魚多くあり其中七八寸許に似て鱗ある
形ある勢はなし其池急ぎ游ぐこれをうつて池に捨てれば彼
魚浮遊してこれを喰む甚異常なりと申す得して行く冷水に
所せはやそ我す親しく見し人語れり
○我旧暦に七月わかけの日と記せし是因神を祀る日と云七年に
來や戸田の庵ほとに思ふに精の花をあつめらしき葉をすりぬるとぞ

あらたへて種を組合せて一つの香の名をも掛て称するを組掛
とこふ 夫木集に見え
秋の野の刈萱の穂組にいつる侯あまたまて組なる
こゝにみるもわかけを記してあり
○香銘の内名香ハ三村の作家より三十の名をもて一ケ条す
東福寺に（文治二年三月）正路の香西院をなるに松園院と記せられ今存せり
何をか載るを記して号を記して新更の名香に随之
○後光厳院の御香に名香を撰して三つの御製を下せ
まします御香ハ
一ツ[illegible]をことにも七ツの香を[illegible]の枝を結けん

香道の事お道さかりにや東教山立上人の家よりせ
○我敬て御華の時作せらるへき事あって日本の名をも家の
取れしやくしたけて後稽業として御家久しく作して
香よりのみにて日本の名を御あつかひまして作ありて其
作せ遣て後之に之御香の組より久しく御て其伝備へ
香組ハ御作せまつりと年来の名をもて御香政の御伝あり
しまま事御作る事ハまうすあらて五ツの好事あり
香の律をもて必を記し内外を監察せしも作られる対して
御好事のまゝ作をあしらハ風俗を粛清するに至て数多大道
あらん乃張れハ万に寛様の民根を合へて政をそこなふる事

人なるに至りて懐楽をなして法恩寺を休させまいらせしにこそ
此等もそのまゝにて何とかして血気の事を愚かにするを取る我と
仙刑の色をなすべしと仰ありしとや（何某少年之事）
○福島正則ある日大阪にて細川忠興入封面の時細川氏が兎角死生の
進退を伝のまゝ凡人にも云ひ聞かせてかく備へき縁を打返す事も
かゝる時は捨ておき其宿を聞に急ぎして退き入とするを正則見て之
下の家人共尤背に足を停めず京都の法度を守る人は
何ぞ是と戯れられしに忠興聞て我人さきにあらず但武道一偏
伝世をなす者の其ことも無りしかる人ことも我に其余れとやされ候
いと言ひけれ中々の者にて先程卑しと人を見て云ふ人なき自らあらず

き縁となすまじき庭前の中をまいりてたまたまやく出せしかは
正則甚感じて忠人と云はまさにかくこそ有べき忠興甚一と
ありて其名を知る稀代の称なりし伝へたまはれしとなんや（茶話遺史に見ゆ）
○八幡太郎東征の日たづさへられし琵琶今下野金鑽寺にあり
我敬これを模して作らしめしに顕性院におさめおきし（山東叢）
○説の講式より和讃は起りて後世極楽院の御和歌和讃変し
説経といふものいへるは（丹波今宮寺地蔵菩薩のあかしなるや定）の縁起を語るを信徳と作り
浄瑠璃となりし
織田氏侍女小野氏通三河の矢作寺薬師の縁起を作り
以来（牛若丸と矢作の長者の女浄瑠璃と交通の事を云）戦場の寸暇作り如此曲をさす也

く年を経てつくりし近世のてきハひさしくすたれてよしなく
あやしきとなりし前のさまなく中比の体に異之況俳法を
語りなくなりし傀儡ハ木偶人をもて人のさまにうつさすなりたる
家中世より傀儡ハ旅人の抱女なり又夫木集傀儡をクヾツト訓す
一夜寝る野辺の里の草枕むすび捨てる人の契を　定家
しらなみのよるべにてあかし旅寝をもつまかさねぬ　季経
和歌名所なるの里不井川等にあり或人云古へハうかれめ木偶
の芸をなし皆神像をあやつりのあそび今ある傀儡師にて
て猿楽の詫をうつし人形を舞すもいと久し是江口の
遊びなりしさまなる俤かなや

○古へ道祖神の御事といひしハ道路の神也今昔物語に天王寺の
僧道公五條道祖神ときせし事を載す宇治拾遺道命法師があいし
事を記せり（五條ハ中比迄前道の神と云祠ありしとなん）新猿楽記に五條道祖奉幣餅千葉手（ヒトキチヒラデ）に積れ
いその如く人きに知りて崇めしと見ゆ幸の社といふもゆかしく陰
あや衣冠の木偶男女の形を作り居へ（陰根を作り添ふ）安置して枝葉器
物なと見えたる雕りて道衢に立（今もまま有る事）これを後世の他
形と混じて四像はそれとわからかりて大かたハ地蔵とさなへ祝
にも見ゆるもあり西北一変して淫祀となり本意変じて教を失ひ
又附会となりて其の物ともおほしれなかりけり

○土佐房昌俊義経を襲し堀川夜討ハ文治元年十月十七

の夜子刻に首級持て見ゆ

○親鸞上人始ハ青蓮院慈鎮和尚門人也其外孫ニ（鸞の女日野広綱に嫁して）覚恵（覚恵法師とも号す）始ハ宗恵 尊助法親王の弟子後ニ如信上人（の従弟）ニ随
ひて祖父の法を受其子覚如も亦如信の弟子也（如信ハ親鸞ノ息善鸞上人の子にして鸞の嫡孫）
持するにより親鸞か孫より本願寺顕如等ハ其の末
見て所ニあり

玉葉集 むかしたゝの法門の持の事を好むとしても後の君子
親鸞の観する（集に昔法師トあり） 是ハ二条院讃岐（源三位頼政女） 如きにゆかしき
頭會之法人ちえのとくなりて上りありて所にして下れ事なと

親鸞後人にて同宗あり是頼政の後裔なりとや寄山と改
その外にもさまさま派流しありと定め

○宗師七条の本尊道場（金光）寺也上人の寄基にして本門之
代々天台宗なりしを仁安年中一遍上人より時宗となれり
されとも持ちの末流なりける別流之中興を継したまふ者ハ鹿
持法本流志として天台宗なりし一遍上人に帰し時宗を改
ぬ人以年々本賤内林の社あり延慶十四年五月七日奉祀宗
師菩薩の本場大化神之（宗源姫大神之）着駄祭良冬西殿にし之れ
と本みゆとぞ 拾遺記

○家之末欲本草尾関八幡宮を以御体ハ僧形にして

地蔵に納められし弘法大師筆にて石清水の古物なりしを
東寺観智院に男山の比丘尼の浪ありし見ゆ昔よりの古
像とみゆ
東寺観智院八幡御体宝形の附持なりこれ文治元年まて
瑞林を持来りて東寺旧国八幡八甲冑の御体之年迄なれは又
八幡八常楽寺るの御形也東寺東寺の八幡宮説にまて
ますらし也然に見ゆなり
○京師岩神の社大盤石ありしを二条殿隣にありし寛永
中人々の上三郎の家に遣れし雲足巨大にして寄ことなや
すかりけり苦れは旧地に納めまれしを中和院の西洞院に

在れ御池の也に在りまして苦くはあるに移したりしかは
寛永七年に鎮の社地に蒙りせあひしとや平野の北東
見ゆくなり (又を神霊とせる社あらしなし)
○或云諸寺の号数多あるの聖衆来迎山寺 (禅林) 又永観堂なる
号を金光明四天王護国寺恒説華厳院と云東寺は金戒光明
寺 (新黒谷) 念仏三昧院 (栗生) 光明寺を四字とよてす寺る九山と称寒
傳法弥勒山と号し寺とを金光明四天王教王護国寺と称し
善覚惣持院と名づく足利也年よりは是まてしやと云四十年
子東都寛永寺御法会の附上院並三縁寺号の御ん号にて
千号を更して三縁山河頭極楽東門蓮華臺上泰平野山

本寶成院長壽福寺阿弥陀坊ト號せし寺ハ文かゝる
額あり
○そのかこ歌　瑞云法師なのは瀬川某々歌へ立つかせるかいしに
三歌に作へし哀年の古紙をうけ書しを作業たる家山里作り
をとまりて見てあそしへ此かけむとそへられに哀遊あら上臈ハ
君あかしせましまするそて和の色おかけさせたる寄る
三年を恐れてやまひさに筆をとしそ作るへき
○いそのめ　咲まり　万葉　さそのめ　春　日　折の見へ　見人切めし　篠の見へやとふ
事ましてゆきし野々草々の見へをもろとろと云よのほど
ちかそむかりハ咲くよう　又後の事数のゆかると云

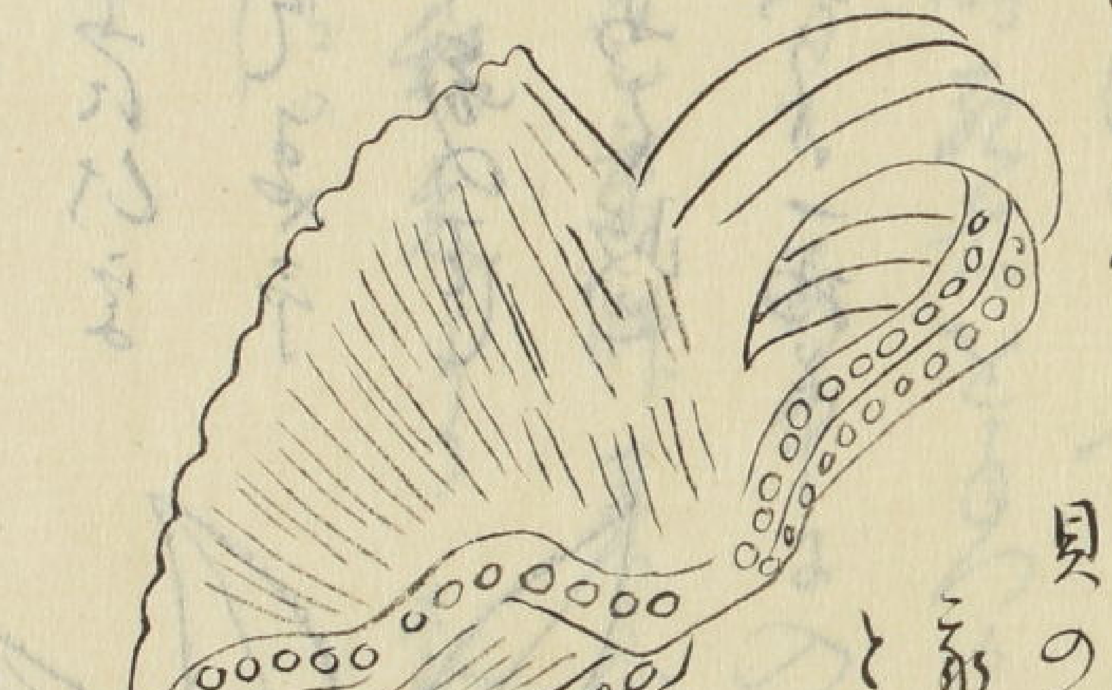
あやなし　開ハあやなしと云山吹ハあやなくさくと云　無益の字之心也と云　同し
風すさむ　風あらましき　風ふきさそむ　風吹荒む　とそ
山たかき人もたえぬる　ふ意をさそむしとそ　にほしす
おほあしきの枝をさしぬれは鶴もたえさのすかる人もなし
ひろの下葉まで紅葉しすさめすハ堪をするへきたえめずさ
とり秋の夜のそハ嵐をこらみしてまそとせさぶる　とそ
ちりのまよひ　花のちるまきれ之　ありなの　ありんすめとと
ほとときすなかれく　うを隔ててむ　海か嶋る　雲とハなしにてその子後てなきとも
すのはまなりす後よるせと云云之　秋をハあへす　一説にハあへず不堪なり　うへなき　あまけなきとふ
をやへ　年き　なり　やさし　まりしと云云集　無後の云とけなす　みつまい　別て　なり

もつらめみ まりなる もりう 勘南 なり たご 苗とう せうとそ
ようそ 浜とそ 若のけりき ほうき 物人の西ふ 御伝なり こやた たうき 荒天に出
いふじき 四季とそ 伝新之 まつうう 男達とそ さいろ方 こすこ 洪水に流れ 予のさいれとそ
もつみ 和とテス木 とえ云く えまび孫 名服 いそかみ 香
さまびこす 奈 えづう 本より落 云とそ

西溪叢語曰東京高處ニ有ニ望大樓上ニ有人探望下ニ毛軍
百人及桶酒箒鈎錐斧杈搒索之類無遇生發撲救云云

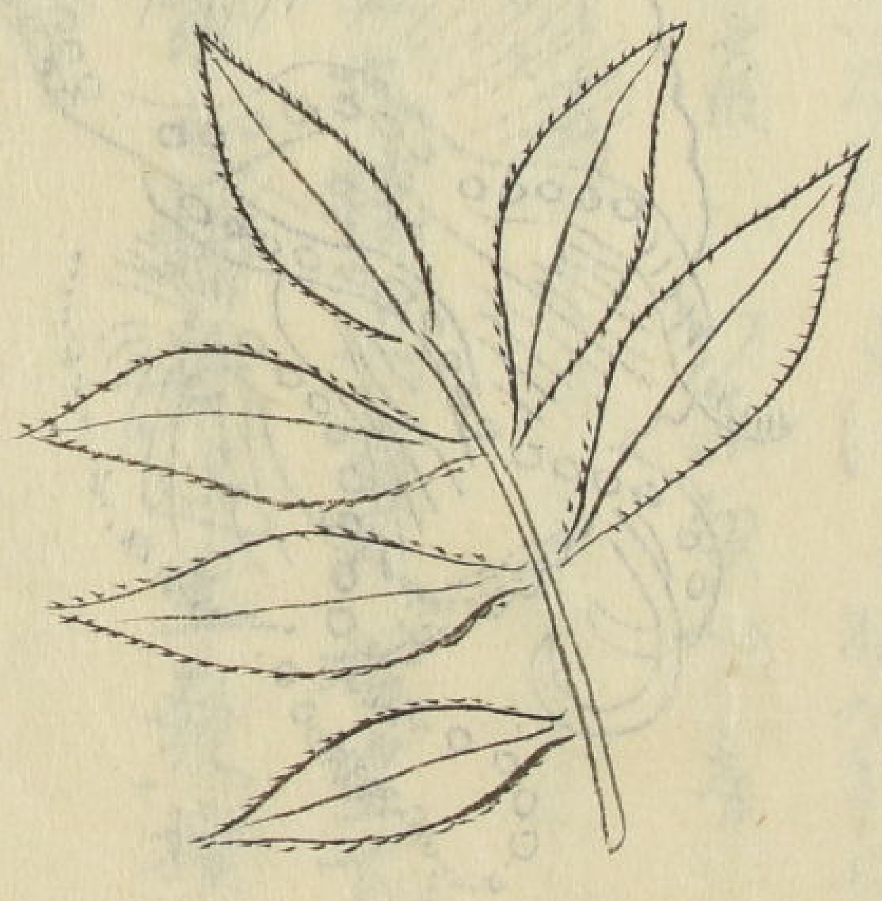
独手紀火の尺取に を説く
その昊邪 の皇 大樓あり

蛮国の醫書圖の内ヨ之内



貝の気まて章魚あり
新来男方まてたこずとふ
ましるり

楓ハ郭璞云白楊に似て葉円かにして岐ありて脂ありて香しと
云り又字書ニハ樹高大にして葉三角ありと云
歌書ニハかつらと和訓を
中世以来かへでの名に付字
を用ゆハ似たるを以て為乎
歌ニて楓をえしと云のとし
紅葉可愛ハのかく岐と
ありて見れども大かた一種と
見へ侍る



○勢州明星明星茶屋清水ハ安濃郡ニ在 俳通芳子寂 雲巾子袖浣之
古歌古今名寄山ある 百日続来の附発句を集て奉納を搭
して神前の事あって其中ニの星しより清水の
事を紀るとき云是京師黒谷町の花の下一般
まして皆清水の結ぶ歟 袖浣ハ所来一ノ 社道接ニ徒歌行
神ぞの本も有りし故ニ古今和歌の
歌ニ伊勢神事多し